

南半球便り（その 57）：クアッド外相会合

2 月 14 日

2 月 11 日にはメルボルンでクアッド（日豪米印）の外相会合が行われました。今日は、そのご報告です。



クアッド（日米豪印）外相会合（撮影：外務省）

1. オーストラリアに祝意を！

日本、豪州、米国、インドの 4 カ国によるいわゆる「クアッド」の会合は、首脳、外相、局長といった様々なレベルで重層的に行われています。クアッドの意義や、首脳レベルでは昨年初めての対面での会合が米国ワシントンで行われたことは、この南半球便りの 37 号【[こちら](#)をご覧ください。】でお伝えしたとおりです。

外相レベルでは、既に 3 回、局長レベルでは 8 回も行われてきています。今回は初めて豪州主催で外相会合が行われたことに大きな意義があります。

4 カ国の外相によるモリソン首相表敬も実現。豪州でも日本でも、写真や画像と共に大きく報じられました。



日米印外相によるモリソン首相表敬（撮影：Adam Taylor, PMO）

2. 「豪州は一人ではない。」

実は舞台裏の事情をお話すると、今回の会合の開催は容易なものではありませんでした。各国ともオミクロンの対応に追われる中、ウクライナ問題は緊張度を増してきており、日本の国会では予算審議の最中でした。日本の祭日に設定したのは、「対日配慮」でもあります。

このような状況下で各国外相の出席を確保し会合を開催できた豪州側の感慨には、ひとしおのものがあつたようです。「外交の力が問われている時」（林外務大臣）のクアッド外相会合。受け入れに当たった主催国のペイン外相による議事運営は、誠にテンポ良く的を射ており、まさに水際だった議長ぶりでした。

そうした中、クアッドの外相会合としては初めてとなる共同声明【[こちら](#)でご覧いただけます。】を発出。4カ国が威圧的な経済慣行に反対することなどが明記されました。

日豪米印の外相が諸般の事情を捺してメルボルンに集い、「自由で開かれたインド太平洋」の推進に向けて声を合わせたのです。ある豪州政府高官は、「豪州は一人でないことがよく分かった。」としみじみ吐露していました。十分に領けます。

3. 聖地でのおもてなし

メルボルンらしいおもてなしは、ペイン外相主催による夕食会が、クリケットの聖地と言われるメルボルン・クリケット・グラウンド（MCG）で行われたことです。1956年のメルボルン五輪の際にメイン会場として使用され、10万人収容というマンモス・スタジアム。日本で言えば、国立競技場と東京ドームを合わせたような存在でしょうか。

人工芝かと間違えるくらい精緻に刈り込まれた聖地の（笑）天然芝のグラウンドの上に立ったとき、観客席が埋め尽くされた時の地鳴りのような声援が耳に響く感じがしたのは私だけでしょうか。

ちなみに、日米を結びつける一つの強力な絆が野球であるのと同様に、豪印を結びつけているのがクリケットなのです。



夕食会の会場となったメルボルン・クリケット・グラウンド

4. 林外務大臣の来訪

豪州の地で勤務する我々にとって何よりも元気を与えてくれたのは、オミクロン対応に追われ、予算審議の最中にも拘わらず、林芳正大臣に遙々メルボルンに来訪いただいたことです。

羽田を10日夜9時半に出発。メルボルンにはチャーター機で11日朝9時半に到着。ホテルに着くなり、抗原検査、PCR検査を経て、いきなり、豪州野党（労働党）幹部との意見交換。そして各国外相との二国間会談、クアッド関連行事等、翌12日正午過ぎに

メルボルンを発ちホノルルに向かうまで、まさに分刻みの日程。豪州滞在は正味 27 時間という強行軍でした。

在外公館の士気があがるのは、外相や総理の訪問を得た時です。日頃の地道な外交で地盤を固めた上で、要人の往来を通じて具体的成果につなげ、さらなる高みにあげていく。外交の要諦です。

年明けに予定されていた岸田総理の来豪がオミクロンで延期を余儀なくされたこともあり、今回の林大臣の来豪には特別の重みがありました。メルボルン総領事館、キャンベラ大使館、シドニー総領事館の混成チームで対応。本官、現地職員を問わず、各自が匠の矜持と熱意を胸に秘めつつ、澁刺と仕事に取り組んでいる姿が印象的でした。

5. 首脳会合へ

クアッドの外相会合は毎年行っていくことが再確認されました。既に岸田総理は、日本が本年前半にクアッド首脳会合を開催することを表明していましたが、今回の外相会合では、日本主催への首脳会合への期待も表明されました。

自由で開かれたインド太平洋の実現に向けて、日本、オーストラリアが米国、インドとスクラムを組んで力強く進んでいく。そんな模様を目の当たりにするにつれ、泥のような疲れが心地よい達成感に代わっていくメルボルン出張でした。

山上信吾